

日本IT書紀

019 発掘

02 溟滓篇
卷之二 鶏子

佃均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細内容は
<https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

第十九

発掘

一

見落とし。

遺跡の発掘調査では、まれにこういうことが起こる。

見慣れた風景、遺物であるためについつい見逃してしま
うのだが、あるとき突然に、ちよつとしたきっかけからと
んでもない発見がある。

一九七八年九月、日本考古学会を揺るがした大事件があ
った。

埼玉県行田市にある「さきたま（埼玉）古墳群」の稲荷
山古墳から出土した鉄剣である。

さきたま古墳群は稲荷山、丸墓山、將軍山、二子山、愛
宕山、鉄砲山、奥の山、中の山、瓦塚の計九基から成り、
丸墓山は径九十メートルを測る日本最大の円墳、稲荷山は
水濠に囲まれた差し渡し百三十八メートルの堂々たる前方
後円墳である。ばかりか、「衙頭」と呼ばれる祭壇を備え
た特殊な構造だった。

「衙頭」は「がとう」と読み、役所の前の広場を指す。

毎朝、役所の幹部が集まって食事をしながら行事の打合
せや作物の熟り具合を語り合った。あるいは国人の訴えを
聞き、罪を犯した咎人を裁いた。朝廷、法廷の「廷」に等
しい。

亡くなった王の威徳を偲び称えるため、その墓の脇に石
像や埴輪で朝廷の様子を再現した。転じて古墳に設けられ
た朝廷再現の場を「衙頭」と呼ぶ。福岡県八女市に残る
「肥の君磐井の墓」には石の像が立ち、法廷の様が再現さ
れていた。このため「石人塚」の異名がついた。

以後は筆者の趣味に属することなので、読み飛ばしてい
ただいて構わない。

紀元六世紀ごろまで、行田市の近くまで江戸湾が入り込
み、古利根川の支流が流れ込んでいた。大阪市堺市の百舌
古墳群と同様、海に臨む高台に大型古墳が築かれたことに
なる。海から川を伝ってきた外部の人を威圧したとも、領
域の出入り口に先祖を埋葬して守護神とする縄文の風習が
残ったともいわれる。

多くの学者が稲荷山古墳に眠る人物について、
——この古墳群の盟主。

とにらんでいた。

七八年の春、同資料館は出土した鉄剣に長期保存の処理

を施すため、二人の学芸員が列車で奈良・元興寺極楽坊の埋蔵文化財処理センターに送り届けた。輸送の際、鉄サビと木片の一部が剥がれ落ちた。その隙間に、わずかに金色を残す泥粒が見て取れた。

センターの研究員がそれに気が付かなければ、それだけのことだった。

「何かあるかもしれない」

研究員は考え、レントゲンの透視写真を撮影した。

写真を現像すると、そこに入り組んだ線描がほの白く浮かび上がった。

埋蔵文化財処理センターというのは、遺跡から出土した品々を長期保存するための科学的処理を施す機関だが、センターの研究員はそれなりに考古学や歴史の知識を備えている。当然ながら線描の意味を即座に理解した。

——まさか。

最初に透視写真を見た研究員は

「思わず鳥肌が立ちました」と語っている。

——文字。

複雑に入り組んでいたのは、刀身の表と裏に刻まれた漢字が重なって写っていたためだった。

研究員たちはその重なり具合と形から一文字ずつレポーター用紙に写し取った。現われた文字は完全ではなかった。

画の省略や欠落があったり、「夕」「名」「多」のいずれとも判別に苦しむ文字もあった。

この発見への対応には、より専門的かつ権威のある人物の知識が必要と判断した同センターは、ただちに関係諸機関に連絡を取った。

解説に当たったのは、奈良国立文化財研究所の埋蔵文化財センター長だった田中稔、平城宮跡発掘調査部長の狩野久、京都大学教授の岸俊男である。

刻まれていた漢字は百十五個だった。

〔表〕

辛亥年七月中記乎獲居臣上祖名意富比跪其兒多加利足尼其兒名互巳加利獲居其兒名多加披次獲居其兒名多沙鬼獲居其兒名半互比

〔裏〕

其兒名加美披余其兒名乎獲居臣世々為杖刀人首奉事来至今獲加多支鹵大王寺在斯鬼宮時吾左治天下令作此百練利刀記吾奉事根原也

あまり馴染みがない人のために若干の解説を加えておくと、この鉄剣銘文の中に「ワカタケル」と読むことができそうな名前や「シキノミヤ」といった地名（かもしれない）

文字があつた。さらには『日本書紀』や『古事記』で欠史八代の大彦（おおびこ）に相当するかもしれない「意富比跪」の文字も見える。

「ワカタケル」がもし雄略天皇（オオハツセ・ワカタケル大王）のことであるとすると、倭の五王の時代、いわゆる大和朝廷が日本を統一したと考えられている五世紀の大王の実在が、金石文で確認されることになる。

金石文というのは、金属や石に刻まれた文字のことである。

石碑、銘文、鑄造の文字などは、まず書き直すのが難しい。しかもこの鉄剣は、長く人目に触れず地中に埋没していた。加えて錆に覆われていて、発掘調査に当たった人たちは文字の存在すら知らず、出土のひとつとして保存することしか考えなかつた。

捏造や改竄が行われる余地はない。

間違いなく、「ワカタケル」王の同時代資料としてピカイチの文献である。

さらに論争の輪を広げたのは「シキノミヤ」という文字であつた。

音から受ける第一感は、奈良県の「磯城の宮」だが、地図を広げると、埼玉古墳群のほど近くに「シキ」という地名がある。現在の地名でいうと「志木」。そこには『延喜

式』に載っている古い神社がある。

神社というのは普通、太古から聖地とされた場所に建てられる。歴史上の聖地とは、おおむね王や領主の住居であり、埋葬地であることが少なくない。となるとそこに本拠を置いていた豪族であるかもしれない。

いや「豪族」というのは奈良盆地を「中央」とすること前提とした表現である。中央の政権に承認された地方の有力者ないし、播居者という意味合いを持つ。

この鉄剣銘文が刻まれたとき、その関係——中央と地方、君臨と臣従、支配と隷属——が成立していなければ、彼はまさにこの地方の大王だったことになる。

ということ、鉄剣銘文発見のニュースが流れるや、大論争が巻き起こつた。論争には考古学者や文献学者はもとより、言語学者、地理学者、地質学者、民俗学者などが入り乱れた。テーマもまた大和朝廷の日本統一論、複数王朝論、前方後円墳形成論など多岐に及び、いまだに論争が続いている。

二

筆者の場合、それほどではなかつたにしても、事実、当惑した。

「明治二十五年」にホレリス式P C Sを日本に紹介した高橋二郎という人のことを、一度は調べてみなければならぬ。国勢院が現物を輸入した大正九年まで、およそ三十年の時間が流れているが、この人物が何かかわりがあるかもしれない。一世紀以上も前のことなので、果たして記録や文献が残っているかどうか。

——調べるだけは調べてみないと。

まず、インターネットでの検索からだった。

インターネットのWebサーチが素晴らしいと思うのは、こういうときである。世界中の何十万、何百万という人や機関が、それぞれの立場でさまざまな情報を掲示している。図書館に行っても蔵書の一覧を検索できる程度だし、しっかりした文献データベースがあっても抄録が精一杯である。ところがWebサーチは、その中に含まれる字句まで照会して表示してくれる。鵜呑みにはできないにしても、手がかりを得ることができる。

「高橋二郎」「人口調査」「国勢院」がキーワードである。この三つの単語を「*」でつなぎ、実行キーを押した。結果が表示されるまでがまどろっこしい。当時、筆者が使っていたインターネット回線は、ダイヤルアップ方式だったためだ。

——あった。

Webサイトのタイトルは、「高橋二郎」でなく、「杉亭二の部屋」となっていた。

戸惑いがあった。だが、手がかりには違いない。

それは日本統計協会（J S A）のホームページだった。

高橋二郎という人は、さきたま古墳群から出土した鉄剣に例えれば、錆の中に光っていた小さな金色の粒に相当した。いや、人物の軽い重いをいうのではない。「きつかけ」という意味で、高橋二郎という人は未知の世界につながる扉だったのだ。

『杉亭二の部屋』の書き出しを紹介すると、

杉亭二（すぎこうじ）は、初代統計局長と言われています。それは、明治四年（一八七二）十二月二十四日太政官正院に設置されたとされる政表課（総務省統計局・統計センターの前身）担当の大王記に命じられたことによります。

いかにも明治の人らしく、白鬚をたくわえた人物の写真が掲載されている。写っている人物は六十代後半であるように見える。官界から引退し後進の指導・育成に情熱を燃やしていたころの撮影ではあるまいか。目は溫和だが、引き締まった口許は強い意思を示している。

杉亭二その人に違いない。

三

以下、Webサイト「杉亨二の部屋」からの抜粋。

杉亨二は、明治維新後の我が国の近代化において人口調査の必要性を説き、明治十二年には国勢調査の試験調査とも言うべき「甲斐国現在人別調」を実施したことで有名であります。同時に我が国の統計学の開拓者、近代的統計調査の先駆者、そして統計教育の先覚者でもありました。

現在、我が国の統計が国際的に非常に高い評価を得るようになったもの、杉亨二の卓越した先見性と行動力に負うところが大きいと言えます。

(中略)

統計家養成のため高橋二郎、寺田勇吉、宇川盛三郎、呉文聰、小川為次郎、岡松徑などの有能な職員を政表課に集め、課務を行うとともに……

一度限りだが、「高橋二郎」の名前があった。

なんと高橋二郎は国勢院の職員だったのだ。

しかもその原点は、杉亨二という人物にさかのぼる。

——ということ……。

卒論は、明治初年から書き起こすことになるのだろうか。最初は一九五〇年代の末ごろから語り始めるつもりだったのだから、それを一世紀近く繰り上げることになってしまう。とすれば、仕様変更もいいところである。契約に基づく仕事であれば、

「無茶だ」

と投げ出すであろう。

わたしは溜め息をついた。

——どうするか……。

進むべきかとどまらるべきか。明治初年までさかのぼる意味があるのか。

まず、意味はないだろう、と思った。次に、

——ともあれ、調べてみるか、と考えた。

——ダメもとで調べてみるのも一興ではないか、とも思った。

商業ベースで考えると、そのような書籍を出版社が積極的に扱うとはとても思われない。しかしそうであればこそ、やってみる価値があるのではないか。かつ、それをやるのは自分においてほかにあるまい。

思いあがりには違いないが、この種の書籍は自分にそう言い聞かせないと書き進むことができないのも事実である。情報が氾濫するこんにち、なにがしかの力をもって事実を

曲げることは適わない。しからば、『古事記』序文がいう「削偽定実」の作業はまず要るまい。

あるいはまた、個々の人物、個々の企業は、それぞれがそれぞれに自身を語るであろう。個々において史観が異なり、かつそのすべてに筆者がかかわるなどということはあり得ない。

すると、より必要なのは、それらを貫く糸としての通史ではなからうか。

それを独りで描くことは、困難であるかもしれないが、不可能と決め付けることもない。

語り部であればコトは済むのである。

だが筆者は、語り始める前に時計の針を十九世紀に戻し、舞台をアメリカに移さなければならぬ。

今日のコンピュータにつながる統計会計機械装置を概観するためである。

~~~~~ 補注 ~~~~~

さきたま古墳群 埼玉県行田市。地質学的考察から、紀元六世紀ごろまで同地の近くまで江戸湾が入り込み、古利根川の支流が流れ込んでいたことが分かっている。大阪市堺市の百舌古墳群と同様、海に臨む高台に大型古墳が築かれたことになる。この古墳群が形成された時期については浅間、榛名、富士など近辺にある火山の爆発で堆積された火山性土壌から検証する方法が提案されている。ことに問題の稲荷山古墳出土在銘文鉄剣の銘文にある「辛亥年」が西暦四一一年、四七二年、五三一年のいずれかを決定するについては、五世紀後半に爆発したことが科学的に明らかになっている。群馬県榛名山二ツ岳の広域火山灰の堆積によっても補強される。

金象嵌鉄剣 長七十三・五センチを測る。東京大学教授齊藤忠男(のち大正大学教授)の指導のもとで一九六八年に行われた発掘調査のおり、稲荷山古墳の後円墳頂上の礫郭から出土した。鞘と思われる木片と鉄サビに覆われたありふれた古代の鉄剣として古墳群に隣接する「さきたま資料館」に保管されていた。銘文発見のち国宝に指定され、現在はそのレプリカが展示されている。稲荷山古墳の被葬者 後円墳頂上に礫棺と木棺の二基が埋葬されていた。時代的にいうと礫棺が古く、鉄剣はこの棺から発見された。木棺は礫棺の主の子が追葬されたと考えられている。この地域を支配した「笠原」氏の祖先とする見方がある。

「ワカタケル」 鉄剣裏面に「獲加多支鹵」とある。

「シキノミヤ」 同じく裏面に「斯鬼宮」とある。

欠史八代 第二代天皇の綏靖以後、安寧、懿徳、孝昭、孝安、孝霊、孝元、開化の八代をいう。皇位継承の伝承と皇后、皇子・皇女のみを記し、事績がないことから「欠史」と称される。

倭の五王 晋朝が崩壊した後、江南に成立した宋王朝(四二〇～七九)と倭国を使者が往来した。倭の王は中国風の漢字一文字で表記され、讚、珍、濟、興、武の五人の王名が伝えられている。この時期は大型の前方後円墳が九州から関東にかけて造られた時期に当たり、史学者は「大和朝廷による統一の過程を示す」と見ている。

鉄剣銘文発見のニュース 最初に報じたのは毎日新聞(一九七八年九月十九日夕刊)である。以後、新聞・雑誌が考古学、文献学、金石学、古代史、東洋史などの専門家の見解を競って掲載した。まとまった論文では「関東と北九州の古代豪族」(井上辰雄)、「鉄剣銘と武蔵国の古代士族」(佐伯有清)、「獲加多支鹵」雄略への疑問(池上巖)、「九州王朝の証言」(古田武彦)などがあつた。削偽定実 『古事記』序第二段に記される天武天皇の詔にある。原文は以下のようなものである。

於是天皇詔之、朕聞諸家之所費帝紀及本辭、既違正實、多加虛偽。當今之時、不改其失、未經幾年、其旨欲滅。斯乃、邦家之經緯、王化之鴻基焉。故惟、撰録帝紀、討覈舊辭、削偽定實、欲流後葉。

文意は、「諸氏が保有する帝紀(天皇の事跡をまとめた記録)と旧辞(神話伝承や諸氏の家伝)は事実と異なり虚飾を加えた部分が多くない。そこで偽りを削り事実を定め、のちのちの世に残す」という。

ここでいう「偽り」とは客観的な意味での誤り、虚偽ではなく、



天皇家にとって都合の悪いことにはかならない。無理な「削偽定実」の結果、『日本書紀』は様々な局面で自己矛盾に陥っている。また天孫降臨神話は天皇家が独占すべきテーマであるにもかかわらず、大伴氏の遠祖が難波・河内地方に降臨したことを認める説話を載せるなど、天皇家が絶対的な権力を掌握し得ていなかったことを示している。

# 日本IT書紀 019 発掘

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会  
<http://www.ossaj.org/>  
[info@ossaj.org](mailto:info@ossaj.org)

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。